

## 磁器の誕生と流通

現在、我々の暮らしの中で当たり前に使われている磁器ですが、実はこの磁器、400年ほど前には日本やヨーロッパなどでは極めて価値の高い貴重なものでした。磁器を最初につくり出したのはいうまでもなく中国であり、磁器は英語で「China」とも呼ばれています。最先端技術の結晶ともいべき中国の磁器は、やがて朝鮮半島や日本のみならず世界各地に貿易品として流通するようになりました。とくに大航海時代にヨーロッパにもたらされた中国の磁器は王侯貴族に珍貴な宝物として愛好されました。

## 日本最初の磁器「伊万里」

17世紀中頃、中国が明・清王朝の交代に伴う混乱の中で海外輸出が停滞すると、当時東洋の磁器貿易を一手に担っていたオランダ東インド会社は磁器の新たな供給元として、日本の「伊万里焼」に目を付けました。というも「肥前国」の佐賀県有田一帯では朝鮮半島の陶工の技術を背景に1610年代に日本ではじめて磁器がつくられるようになり、佐賀藩の磁器生産への積極的な産業化政策に伴い、急速にその技術を高めていたからです。有田一帯でつくられた磁器は伊万里の港から積み出され日本全国に流通したことから、「伊万里焼」の名で呼ばれるようになっていました。

## 伊万里の海外輸出

景徳鎮窯など中国産磁器の代替品を求めていたオランダ東インド会社は、中国の上絵付け技術などを取り入れ技術革新を進めていた伊万里焼に注目しました。有田の陶工たちは厳しい品質基準の注文をクリアすべくさらに技術を高め、景徳鎮磁器に勝るとも劣らない品質の磁器をつくりだしたのです。1659年にはオランダ東インド会社から大量の注文を受け、伊万里がはじめてヨーロッパにもたらされ、こうして伊万里／IMARIの本格的な輸出時代が幕開けしました。当初輸出された伊万里には、景徳鎮磁器のコピーや、ヨーロッパの陶器などの器型に基づいた飲食器などの実用品が多く、そのためか染付の割合が多くなっています。なかでも、明朝末期に景徳鎮がヨーロッパ向けに大量に輸出した「芙蓉手」皿の写しはその代表です(図1)。



◀図2 色絵花鳥文角瓶 いろえかちょうもんかくびん (一対) 佐賀県立九州陶磁文化館蔵  
柿右衛門様式の角瓶です。欠損した口の部分と蓋、そして台座には金属製の飾りが施されて華やかさが増しています。ヨーロッパではこうした金属装飾がつけられる場合もありました。ポプリボットとして用いられたともいわれています。



▲図3 色絵美人文六角大壺 いろえびじんもんろっかくおおつぼ 大阪市立東洋陶磁美術館蔵  
元禄年間(1688-1704)以降、ヨーロッパ向けに日本の風俗意匠をとり入れた豪華絢爛な金襴手様式と呼ばれる色絵磁器が数多くつくられるようになります。浮世絵風の美人文は日本らしさを象徴しています。随所に施された金彩が華やかさを増しています。

◀図5 色絵ケンタウロス文皿 いろえけんたうろすもんざら 大阪市立東洋陶磁美術館蔵  
ギリシャ神話に登場する、上半身は人、下半身は馬の姿のケンタウロスが描かれた皿です。ヨーロッパからの注文に従ってつくられたものです。有田の絵付け師は、奇怪な半人半馬のケンタウロスをどのように思いながら描いたのでしょうか?

## ヨーロッパの宮殿を飾ったIMARI

輸出された伊万里は、当初の染付中心のものから次々と新たな製品が生み出されました。1670年代頃に乳白色の型づくりの上品な白磁(「乳白手」)に繊細な色絵を施した色絵磁器がつくれ、これが今日「柿右衛門様式」として知られているものです(図2)。柿右衛門様式の製品はヨーロッパで好評を博し、後に各地でその写しがつくられました。さらに、1690年代頃からは金を加えた豪華絢爛な「金襴手様式」の製品が主流となりました。1680年代中頃に中国からの磁器輸出が再開しており、金襴手様式の製品には、浮世絵などに見られるような美人文など日本的な文様が多く見られるようになるのも(図3)、中国産磁器との熾烈な国際競争の中で差別化を図るメイド・イン・ジャパンの戦略とも考えられます。さらに、磁器とともに当時日本から盛んに輸出されヨーロッパで愛好された漆器(英語で「Japan」とも呼ばれます)の蒔絵技法を磁器の装飾に用いた珍しい例も知られています(図4)。一方、輸出伊万里には、特別の注文によって貴族の紋章や西洋的意匠の施された製品も多く見られます(図5)。

ヨーロッパにもたらされた伊万里は高級実用品としてのみならず、王侯貴族の宮殿や居城、邸宅を彩る室内装飾用の美術工芸品として熱狂的に愛好されました。今に伝わるIMARIからは当時のヨーロッパの華やかな生活文化の一端をしのぶことができます。

本展では、日本初公開となる当館所蔵の輸出用伊万里を中心に、サントリ美術館や佐賀県立九州陶磁文化館の所蔵品を加えた約190作品により、ヨーロッパの宮殿を飾ったIMARI／伊万里の魅力をご紹介します。なお、本展出品作品の大阪市立東洋陶磁美術館所蔵の伊万里による、台湾の国立故宮博物院南院の開館記念展(2015年12月～)の開催が決定しており、世界を魅了したIMARIが今改めて注目されつつあります。

(当館主任学芸員 小林仁)

### 記念講演会

#### ①「古伊万里様式の美の秘密」

日時 平成26年8月24日(日)  
14:00～16:00(受付は13:30より)  
講師 鈴木由紀夫氏(佐賀県立九州陶磁文化館・館長)

#### ②「ヨーロッパの宮殿を飾った東洋陶磁」

日時 平成26年9月20日(土)  
14:00～16:00(受付は13:30より)  
講師 出川哲朗(大阪市立東洋陶磁美術館・館長)

### 記念講座

#### 「西洋宮廷の磁器陳列—古伊万里をめぐる絢爛の世界—」

日時 平成26年9月28日(日)  
14:00～16:00(受付は13:30より)  
講師 櫻庭美咲氏(国立歴史民俗博物館・研究部・機関研究員)

### いずれも

場所 大阪市立東洋陶磁美術館・地下講堂  
定員 50名(先着順、当日11:00より整理券を配布)  
参加費 無料(ただし、特別展の観覧券が必要)

※学芸員による連続レクチャーなどその他のイベントについては、当館ホームページに追って掲載します。

関連  
イベント  
event

## ◆学芸員のおススメコレクション◆

### 天王寺動物園 ブチハイエナ(剥製)

大本営発表「空母三、巡艦等四轟撃沈 豪壯・第五次ブーゲンビル島沖航空戦」  
昨年秋、当園で所有しているブチハイエナの剥製の修復中に、剥製のお腹から出てきた新聞の記事です。この記事は昭和十八年十一月十八日の日付となっていますので、この剥製が戦争中に作成されたものと推測されます。本来であれば剥製を作成するときの詰め物に新聞紙などは使用しないのですが、この剥製には粘土も使われていました。この剥製を見ていると、戦時中の物資のない時にもかわらず「過去の教訓として、処分された猛獣たちを剥製の形で後世まで残しておきたい」と決断した先人の平和に対する強い思いが感じられます。(天王寺動物園 獣医師 今西 隆和)

この剥製は他の猛獣の剥製と共に8月9日(土)～24日(日)まで、国内レクチャールームで開催される「戦時中の動物園展」で展示されます。

天王寺動物園 所在地 〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-108  
TEL 06-6771-8401 FAX 06-6772-4633 アクセス 御堂筋線「動物園前」、堺筋線「恵美須町」駅から徒歩約5分  
ホームページ <http://www.jazga.or.jp/tennoji/nakigoe/>



ブチハイエナ(剥製)

大阪市立博物館・美術館・動物園

大阪てくてくミュージアム

大阪市立東洋陶磁美術館／大阪市立科学館／大阪市立美術館  
天王寺動物園／大阪城天守閣／大阪歴史博物館  
大阪新美術館建設準備室／大阪市立自然史博物館

